

大杉谷国有林からの手紙

11通目 ～森林施業の移り変わり～

谷をわたる風は冷たく、林道の水たまりに氷が張るなど、大杉谷が静かな時間に包まれる季節になりました。もちろん、現在も、健全な森林を目指して、間伐を実行中です。

前回、「大杉谷国有林」のスギやヒノキの人工林は、私たちの先輩の皆さんが、人里離れた奥山で、寝泊まりしながら、黙々と植え、育ててきたものです」とお話ししましたが、今回は、三重森林管理署に残っている資料を参考に、もう少し詳しくご紹介します。

1 「御杣山」から「御料林」へ

かつて大杉谷は、伊勢神宮の式年遷宮のための木材を供給する「御杣山」とされ、第43回遷宮（1629年）から、第51回遷宮（1789年）まで何度か伐採が行われたという記録が残っています。

それ以降、大杉谷は伊勢神宮と深い関係をもつ森林として特別な保護のもと、（江戸時代に紀州藩領として、藩用材の伐出があったという記録もありますが）長らく人手の入らない原生的な森林として扱われてきました。

明治維新後、大杉谷は官有地となり、明治23年には皇室の財産として管理する宮内省御料局（大正13年以降帝室林野局）の管理の下に置かれ御料林となりました。

明治27年、奈良県川上村の林業家、土倉庄三郎氏に立木の一部が払い下げられ、これを機に大杉谷から原木が市場へと向かうこととなりました。現在も「土倉古道」として残る道や大台ヶ原に至る登山道が開かれるなど、大杉谷の森林施業が本格化してきました。



昭和初期、手斧によるツガの伐倒



「土倉古道」を利用した木馬運材

2 「御杣山」から「国有林」へ

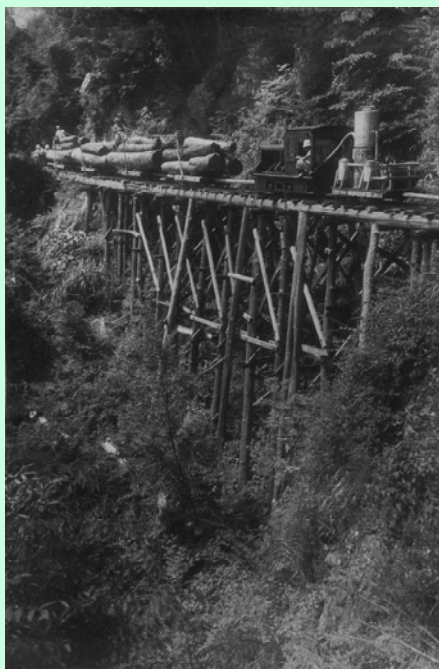
明治33年に、御料林施業案が編成され、伐採するだけでなく造林事業も開始され、スギの植栽が初めて行われました。

また、運材事業についても、昭和6年に、木材を運び出すための大杉谷軌道に着手、その後も当時東洋一と伝えられる大杉谷索道、高低差を利用するインクラインなどの大掛かりな工事が始まり、昭和8年に、不動谷製品事業所の設置、昭和4年に、天然更新試験の開始、昭和12年に、パルプ製作工場が設置されました。



不動谷製品事業所（最盛期には70人ほどが生活）

このあと、昭和22年の林政統一により、農林省所管の「国有林」となり、昭和32年に、大台林道(自動車用道)に着手するなど積極的な管理経営を継承し、昭和34年の伊勢湾台風後には、年間約18,000m³を生産するなど、昭和30年代をピークとして、不動谷や大和谷を中心に伐採と造林が行われました。



大杉谷軌道（森林鉄道）



インクラインによる運材

その後、時代は移り、平成3年に、原始的な森林を後世に残していくため、大台ヶ原の北東側に位置する国有林、約1,400haを「大杉谷森林生態系保護地域」に指定しました。

今回、参考とした「大杉谷昨今」には、まだまだ、数多くの貴重な写真が残されていますが、それはまた、次の機会に。これらの写真を見ていると、「この歴史ある大杉谷を未来の子ども達に引き継いでいくため、間伐などの森林整備やシカ被害の防止に全力で取り組んでいかなければ」と気持ちが引き締まります。

（発行：三重森林管理署 尾鷲森林事務所 地域統括森林官）